

かきところへいできたりて、なにごとせんするぞとみれば、算のふくろをひきときて、さんをさ
らさらといたしければ、これを見て女房ども、これおかしき事にてあるか〜と、いざ〜わら
はんなどあざけるを、いらへもせで、算をさら〜とをきゐたりけり、をきはて、ひろさ七八分
ばかりの算のありけるを、一とりいで、手にさ、げて、御せんたちさはいたくわらひ給てわび
給なよ、いざわらはかしたてまつらんといひければ、その算さ、げ給へるこそおこがましくて
おかしけれ、なにごとにてわぶばかりはわらはんぞなど、いひあひたりけるに、その入ふんばか
りの算ををきくはふるとみれば、ある人みなながら、すゝるにゑつほに入にけり、いたくわらひ
て、と〜まらんとすれどもかなはず、はらのわたきる、心ちしてしぬべくおほえければ、なみだ
をこぼし、すべきかたなくて、ゑつほに入たるものども、物をだにえいほで、入道にむかひて手
すりければ、さればこそ申つれ、わらひあき給ぬやといひければ、うなづきさはぎて、ふしかへり
わらふ〜手をすりければ、よくわびしめてのちに、をきたる算をさら〜とおしこぼちたり
ければ、わらひさめにけり、いましばしあらましかば死なまし、またか計たへがたきことこそな
かりつれとぞいひあひける、わらひこうじてあつまりふして、やむやうにぞしける、

〔源平盛衰記 三十三〕光隆卿向木曾許、附木曾院參禎事

木曾庭上ヲ子リ廻リ、彼方此方ヲ立渡テ、穴面白ノ大戸ヤ、セトヤ、中戸ニモ繪書タリ、下内ニモ唐
紙押タリトゾ嘆タリケル、殿上階下男女畏シサニ、エ咲ハデ、忍音ニ咲壺ニ入テゾ、咲ケル、

〔源平盛衰記 三十四〕明雲八條宮人々被討、附信西相明雲事

刑部卿三位頼輔略○中 裸ニテ野中ノ卒都婆ノ様ニテ立給ヘリ、サシモ淺増キ最中ニ人々皆腸
ヲ斷略○中 此三位ノ兄公越前法橋章救ト云人アリ、彼法橋ノ中間法師軍ハ如何成ヌラントテ、立

出テ見廻リケル程ニ、河原中ニ裸ニ立タル者アリ、何者ゾト思、立寄テ見タレバ、三位ニテゾ御座